

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その10－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 栗 博志・高田 昌実・上村 章
田島 紘己
加治木温泉病院 夏越 祥次
東区・荒田支部 栗 隆志

[はじめに]

リスト (1811～86) は、祖国の貴族達の奨学金を得、10歳の時に両親と共に祖国ハンガリーを後にした。ウィーンでチェルニー、サリエリに学び、12歳でパリに到着後は更にパエール、ライヒャに学んだ。

13歳でピアノ業者エラルルの援助で、パリで演奏会を持って以来、生涯スーパースターであった彼は、社会への恩を忘れる事なく、社会活動、教育活動、音楽家の地位向上に努めた (図86)。

一方ショパン (1810～49) は、幼少時にジヴヌィにピアノを、ワルシャワ音楽院でエルスナーに主に作曲を学んだ。

20歳の時、祖国ポーランドの11月革命前夜の11月2日、強い決意で祖国を後にした。リストと異なり、21歳でパリに到着した時、ショパンは既に一人前の音楽家であり、恩を感じなければならない人は、誰もいなかった (と彼は思っていた) のである。

パリの新参者は、パリの古参のリストらの賛辞、共演などの援助、ラージヴィル公爵ら



図86 生涯スーパースターのリスト
1886年6月5日、多くの弟子や信奉者に囲まれて。2列目中央がリスト。
(Burger : F. Liszt. Princeton Univ. Press, 1989)

の好意で、瞬く間にパリ上流階級の寵児となり、労働者の賃金が3-5フラン/日の時代に、富裕層の婦女子から、1レッスン20フラン以上（3千フラン/月）の高収入のピアノ教師となり、更には素人ながら音楽の才と美貌にも恵まれ、華やかな出戻り生活を送っていた、ポツカ伯爵夫人とも親しくなったのである。ショパンは若くして、あこがれの貴族風的生活を手にしたのであった。

ショパンは、ベルリオーズ、メンデルスゾーンには、ほぼ無関心。過大な賛辞でショパンが世に出る事に努めたシューマンを嘲笑し、リストの作品や演奏には嫌悪感を抱き、献身的なジョルジュ・サンドやジェーン・スターリングには、不平・不満を言うシニカルな性格であった。ただ現金なもので、リストがショパン自身の曲を演奏する時は、羨望の眼差しで聴き入るのであった。

ショパンの性格と才能を理解していたリストが、ショパンの不在の時、彼の部屋をマリー・プレイエルとの違い引き (tryst) に使った事を知られた時以外は、ショパンとリストは最も親しい友人であった。

[4] ジョルジュ・サンド

(6) ショパンとリスト

ショパンは19歳の時、ワルシャワでパガニーニの演奏を聴いたが、その時の彼の反応は淡泊である。パガニーニの弾いた「ヴェニスの謝肉祭」のピアノ編曲「パガニーニの思い出」という、わずか3分半の美しい旋律の曲を書いただけである。

彼は他人の高度な演奏技術には全く興味を示さなかった。他の音楽家の影響を受けない（前記のバッハ同様）という彼の性格は、この時期には形成されていた事が分る。

実際、彼の演奏技術は、19歳の時には、ほぼ頂点に達しており、他人の技術を気にする必要すらなかったからである。リストに献呈

した「練習曲、作品10」が、29年（19歳）には完成していた事からも分る。

一方パリで、20歳の時にパガニーニを聴いたリストは、興奮し刺激され「私はピアノのパガニーニになる」と決心し、演奏技術の向上に心血を注ぎ「鐘による華麗なる大幻想曲」後年「パガニーニによる大練習曲」等作曲。シューマンも「パガニーニの奇想曲による6つの練習曲、作品3、6」などを、ブラームスまでもが「パガニーニの主題による変奏曲」を書いた。いずれも高度の技巧を要する大曲で、ショパンとは極立った対比を示している。

ショパンは、彼以前や同時代の音楽家、文学・絵画等の芸術、宗教などの影響を全く受けなかった、稀有なロマン派の音楽家であった。

ショパンの作品を概観すると、作品番号付きの74曲と作品番号の無い28曲、計102曲のうち、パリで最初の演奏会を開いた22歳までの作品は、各々20と22曲の42曲に及ぶ。

その中には「ソナタ第1番」「練習曲、作品10」「P協奏曲第1、2番」他、マズルカ、ロンド、ノクターン、ポロネーズ、ワルツ、エコセーズ、バラード（スケッチ）など主要な曲が網羅され、この頃、ショパンの音楽の根幹は完成の域に達していた事が分る。

一方45年から死の49年までの5年間に作曲された曲は、わずか13曲である。

ショパンの曲が詩情豊かで、瑞々しい息吹きと若々しい躍動感に満ち、あるいは少年期から青年期特有の鋭い感受性と感傷に溢れているのは、これらが文学的意味を持つからではなく、偏に祖国の政情と風土、および彼の天賦の才、靈感に因るもので、感性豊かな若い時期に作曲されたからに他ならない。

ショパンは、自らの感性を短い生涯で完全燃焼し、作品の中に昇華し尽したのである。

ショパンは、多くの伝記作家が創造したような単純なロマンチストでも、柔弱で病的な感受性と悩める魂を持った感傷的な人間でも

なく、ある意味、自己中心主義、利己的、現実的でありながら、自分の才能のみを信じ、強い意志で短い生涯を生ききった、孤高の芸術家であった。そして、この事が、ショパンがピアノ音楽史上で、特別の位置を占める事を可能にしたのである。

このショパンの生涯を最も理解していたのが、リストであった。

図87は、ウィーン学派他、ピアニストの系譜である。これから分かるように、ショパンは自己の才能のみで、独自の境地に到達したと言っても過言ではない。

それ故、ショパンは、演奏法、教育法を学んだり、熟知した教育者ではなかった。

彼は、宮廷音楽家や音楽院の教師になる事はなかったし（ロマン派の音楽家は、生活のため、後進教育のために、多くが、それらの

職業に就いた）、彼の弟子で大成した者は一人もいない。

ショパンの曲は、今日まで多くの人に愛されてはいるが、基本的には、誰の為のもでもなく、ショパン自身の為のものであった。

バッハやシューベルトらも、死後は忘れられようとした。実際、忘れられた音楽家は枚挙に暇がない。ショパンの死後、世間の関心が次第に薄れてきた中、ショパンを増々懐かしむ友人が一人いた。彼は雑誌「フランス音楽」に、仏語で次々に論文を投稿。1851年には、単行本の大著として発刊した。

伝記「F.Chopin」（図88）である。

著者はショパンと同世代人で、パリで同時代を生き、ショパンの性格と才能を早くから見抜き、ショパンにサントを紹介し、ショパンの生涯と音楽を知り尽した音楽家F.リスト、

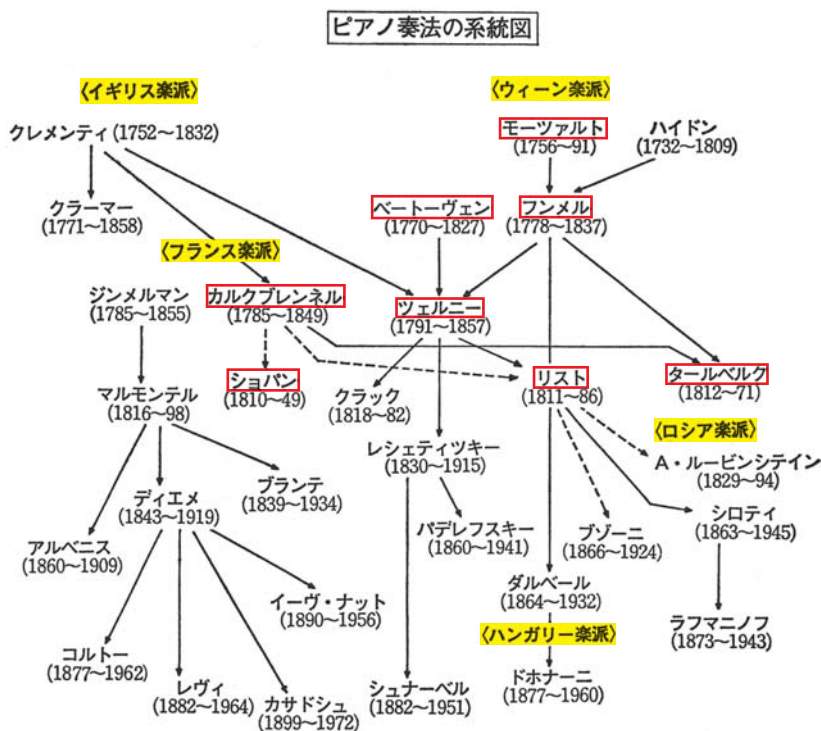


図87 孤高のピアニスト、ショパン
ショパンの前に偉大な師なく、ショパンの後に弟子なし。
(大宮眞琴：ピアノとピアニスト。青土社、1980)

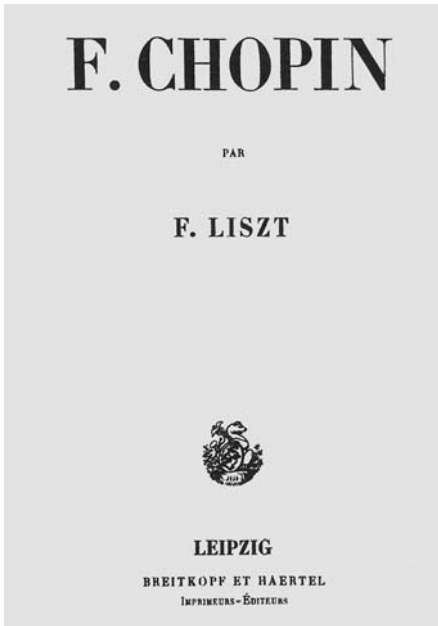


図88 F. リストによる大著「F. ショパン」
この伝記（1851）により、ショパンの名は不朽となる
（仏，英，独語）。

その人である。

この大著は、ショパンの作品、演奏、人生を余す所なく伝えている。文章はショパンを賛美する美辞麗句で飾られ、読むのに抵抗も感じるが、これは文学者、思想家で教養豊かなカロリーネの多大な協力の賜（？）である。

この大作は、その後、版を重ね続け、仏語の外、独語、英語にも翻訳され、ショパンの偉大な音楽家としての地位を、不朽のものとしたのである。ショパンの伝記、書簡集などが発行されたのは、主に1950年以降であるが、そのきっかけとなり、底本となったのが、このリスト著の「F. Chopin」である事は、銘記すべきであろう。

(7) 駆け足で辿る、録音に見るショパン演奏史 ・自動演奏ピアノの時代

1900年初頭より、精巧な装置が作られ、多くの録音が残された。図89はCBSソニー創業10周年記念の「世紀の大ピアニスト達（全7巻）」

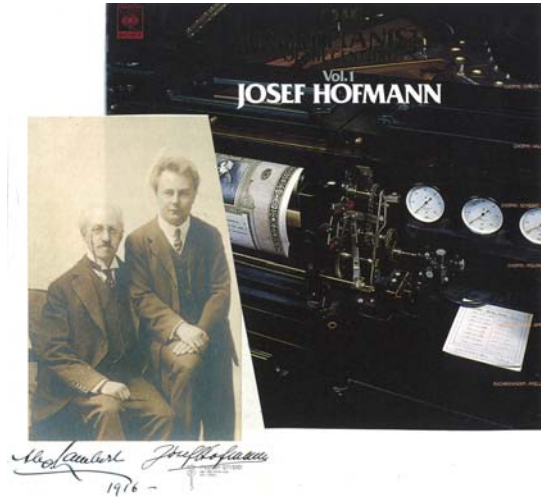


図89 精巧な自動演奏ピアノ
ヨセフ・ホフマンのポートレート（1916）とLP。

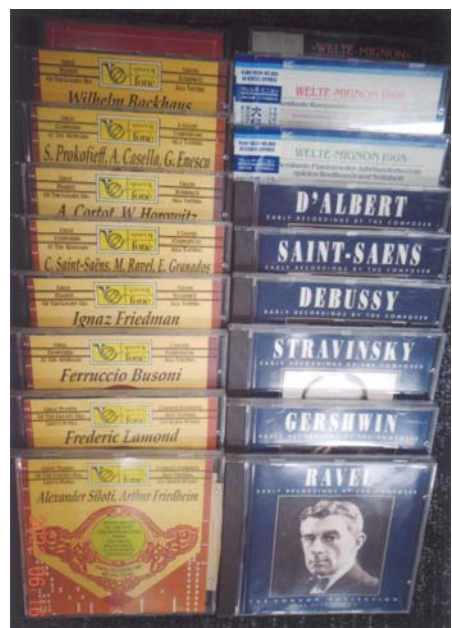


図90 自動演奏ピアノ（CD録音）
当時の作曲家の自作自演やピアニストの演奏が楽しめる。

のLP化である。1巻はヨーゼフ・ホフマンで、ショパンの「Pソナタ第2番」などが収録されている。スクラッチ・ノイズが無い点、音質は良い。

多くの作曲家の自作自演や、歴史的な大ピアニストの演奏が楽しめる（図90）。

• SPレコードの時代

図91に示すように、モイセイヴィッチ、ローゼンタール、パハマン、ホフマンなどがショ



図91 SP時代のショパン弾き
モイセイヴィッチ、ローゼンタール、パハマン、ホフマンの録音。



図92 20世紀を代表するショパン弾き
ポーランドのパデレフスキ。

パン演奏を多く残している。

この時代で重要なのは、ポーランドのパデレフスキ(図92)とコルトー(図93)である。コルトー(と弟子のフランソワ)は、ショパンを系統的に録音。个性的名演である。

• LPレコードの時代

LP初期では、リパッティのショパン(ワルツ)は名盤。33歳の若さで白血病で天逝。

アルゲリッチは、一時、彼の妻、マドレーヌに学んだ(図94)。

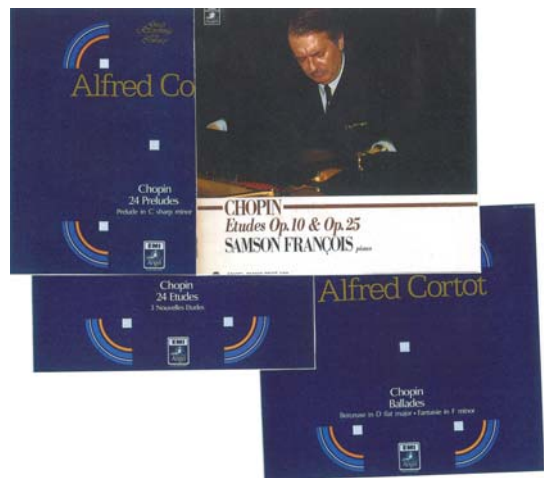


図93 20世紀を代表するショパン弾き
系統的にショパンを録音したコルトーと弟子のフランソワ。



図94 珠玉の名盤を残したリパッティ
コルトーの弟子。33歳で白血病で天逝。



図95 ショパン・コンクール1位入賞者の演奏記録と審査風景
第1～8回の9人(ポリニ6回, アルゲリッチ7回)の演奏。

ショパン・コンクールは、1927年に始まった。図95は、第1～8回の第1位9人の録音を収録したLPで興味深い。

ただ第10回は、多くの問題点を世間に露呈する事となった。私も以後、このコンクールに対する興味を失った(図96)。

そもそも演奏技術に差が無くなった現在、商業的問題を別にすれば、演奏という芸術に順位をつける事は不可能であろう。

グールドとマクレーアの対談「コンサート・ドロップアウト(68)」でグールドが鋭く指摘しているように、大ホールで聴衆や審査員を歓ばせようとする演奏は、演奏家と音楽をだ



図96 ショパン・コンクールの演奏者
1位入賞のダヴィドヴィチ、ポリニ、アルゲリチ、ツィンマーマンと本選落ちのポゴレリチ。



図97 「コンサート・ドロップアウト(1968)」
グールドとマクルーアの対談。
「コンサートは死んだ」等、グールドの演奏、録音の見解。

めにする、と言う事になろう(図97)。

実際、コンクールの大会場での光景をショパンが見たら、ショパンはどんな感想をもつであろうか？

ここで、ショパンを愛した2人の大ピアニスト、ルービンシュタインとホロヴィッツの



図98 ショパンを愛した2人の大ピアニスト
ルービンシュタインとホロヴィッツ。
2人の丁寧なサインも秀逸。

音楽を聴くとしよう。前者の67年、後者の76年のサインも丁寧に書かれ逸品である(図98)。

図99は、1840年前後のパリで活躍した、高名なピアニスト達である。

この内、何人が今日でも広く知られているであろうか？ シューマンやリストに暖かく見守られて、ショパンは幸運だったに違いない。

(つづく)



図99 1840年前後にパリで活躍したピアニスト達
前列左よりウォルフ、ヘンゼルト、リスト。
後列左よりローゼンハイン、デラー、ショパン、ドレイショック、ターベルグ。
(ニコラス・モーリンによるリトグラフ、1842)